

震災時の資料収集と情報発信

— 『震災文庫』の挑戦—

稲葉 洋子

(大阪大学附属図書館利用支援課長)

1. はじめに

ただ今ご紹介いただきました大阪大学附属図書館の稲葉洋子と申します。本日はどうぞよろしく願いいたします。

大阪大学の稲葉がなぜ今回神戸大学の「震災文庫」のお話をするのかということについてお話ししますと、先ほど紹介がございましたように1995年1月17日に兵庫県南部地震が起りましたが、当時勤めておりました神戸大学附属図書館で「震災文庫」の構築に携わり、2001年3月までかかわっておりました。その後、友人たちの勧めによりまして、「震災文庫」構築のいきさつ、分類とか整理法につきまして、100ページ足らずの本ですが出版させていただきました。「震災文庫」構築の初めの思いというようなものを後輩に伝えていきたいということが一番の願いでした。

この講演依頼がございましたとき、私は神戸大学を離れてもう既に7年半たっております。「さて、受けていいものやら」ということでまず上司に相談した上で、神戸大学附属図書館の事務部長に相談いたしました。事務部長からは、ぜひ「震災文庫」の広報をお願いしたいと言われまして、本日こちらでお話しさせていただくことになりました。

お話の内容は、約9割が「震災文庫」の構築について、そして後半で今の「震災文庫」の活動につきまして少しお話しさせていただきたいと思っております。

2. 兵庫県南部地震の発生

兵庫県南部地震が起きまして、それによって被りました被害を阪神・淡路大震災と申しておりますが、1月17日午前5時46分、マグニチュード7.3の大地震でした。これから、「震災文庫」のデジタルギャラリーで公開しておりますスライドを幾つか見ていただきたいと思います。

今年で地震から丸14年たちました。多分皆さまの脳裏からは当時の震災の状況はほとんど薄れているのではないかと思います。「震災文庫」の資料というのはそのほとんどが寄贈資料です。その資料が生まれた背景を本日、ご自分の目で追体験していただければ、被災された皆さまが資料を「震災文庫」に寄贈したいという思いもお分かりになるかと思います。

スライド(1)

これは地震直後の灘区、ちょうど神戸大学のちょっと下あたりから海の方を望んだ写真です。もう既に火災が発生して黒い煙が出ております。

スライド(2)

これは神戸大学の図書館の一番上の塔から灘区、市内を望んだところです。先ほどと同様に黒煙を上げております。



スライド(1)



スライド(2)

スライド(3)(4)

神戸大学から真っすぐ南の方に降りて行きますと、まず阪急電車が通っておりまして、その下に JR が通っております。その JR のちょっと北側に商店街がありますが、これはその近隣の様子です。倒壊家屋が見えております。そして、これも同様、その近辺の民家の様子です。向かって左側の方は軒並み家が倒壊しております。



スライド(3)



スライド(4)

スライド(5)

これが JR 六甲道駅です。高架になっておりますが、線路ごとすべて倒壊しております。駅はちょうどこのつぶれた下になっております。



スライド(5)

スライド(6)

神戸大学のある神戸市灘区から西の方に行きますと、中央区、兵庫区、長田区その次が須磨区になりますが、その須磨区の火災の状況です。

スライド(7)

須磨区の手前の長田区。当時非常に大きな火災が起きました、長田区の火災です。



スライド(6)



スライド(7)

スライド(8)

そして、これがその火災の跡です。ついせんだってありましたイスラエルのガザ攻撃の風景と変わらないような、無残な焼け跡になっております。



スライド(8)

スライド(9)

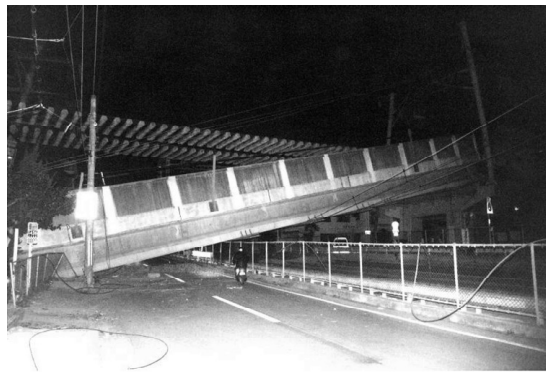
これが兵庫区の道路の陥没の状況です。この下に地下鉄が通っておりますが、地下鉄を通すことにより地盤が少し弱くなったのかなと思いますが、道路が陥没してたまたまいた車が沈んでおります。

スライド(10)

これは、上の落ちている方が山陽新幹線、下が阪急電車ですが、阪急電車の上に新幹線の高架が落下しております。



スライド(9)



スライド(10)

スライド(11)

これは東灘区ですが、避難所がいっぱいで公園に避難している方たちが夜、火をたいて暖をとっている状況です。1月17日ですからちょうど今ぐらいの夜を想像していただければと思います。

スライド(12)

これは中央区にあります神戸市役所の建物です。手前の建物の途中が崩壊しているのがお分かりかと思います。その奥に高い建物がありますが、それが新館、手前が旧館なのですが、神戸市役所もこのように建物が倒壊とは言いませんけれども、非常に大きなダメージを受けております。先ほど内田先生もおっしゃいましたけれども、この撮影をされた方はプロのカメラマンですが、この頃はプロのカメラマンの方が、どの建物が垂直に立っているのかが分からないと言われるぐらい斜めにかしいでいる建物が多かったと言われております。



スライド(11)



スライド(12)

スライド(13)

これは市立西宮高校です。ちょうど左と右と違う層の上にまたがって建てられたために、間のところが倒壊しております。

スライド(14)

その中の状況です。たまたま職員室が写っておりますけれども、職員室の机が全部左の方にかしいでおります。こういう状況です。



スライド(13)



スライド(14)

スライド(15)

これは当時、倒壊した建物等がどんどん解体されまして、廃材を運ぶトラックが長い列を作っておりました。



スライド(15)

スライド(16)

これは当時どこの体育館も避難所となりました。その様子です。本当にプライバシーもありませんし、ただただ寝るだけの場所です。その上、体育館というところは通常は暖房器具が使えません。ですから1月から3月ぐらいまで、本当に寒い日を過ごされたと思います。

スライド(17)

これは避難所に全国から届いた衣類をボランティアの方が仕分け作業をする前の写真です。



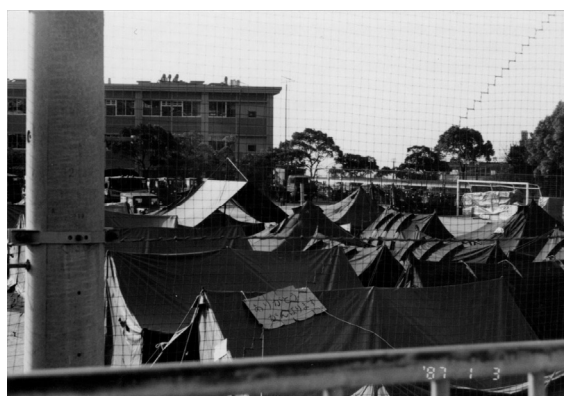
スライド(16)



スライド(17)

スライド(18)

私の自宅はちょうど神戸大学の山側にあるのですが、神戸大学は六甲台キャンパスに二つの大きなグラウンドを持っております。その二つのグラウンドが自衛隊の基地となりました。グラウンドに自衛隊が多くの特ントを張りまして、3月まで約2カ月間、ここから神戸市内の救援活動に向かいました。



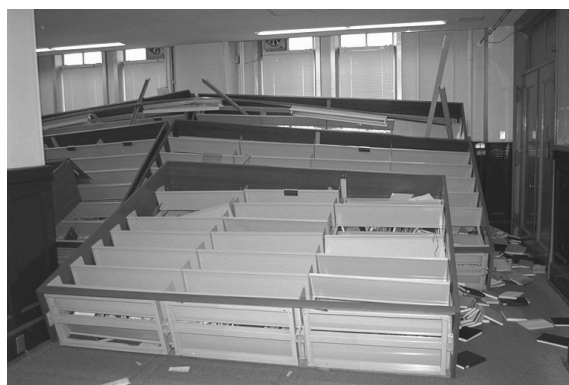
スライド(18)

スライド(19)

ここからは神戸大学附属図書館内部の被害状況をご紹介します。震災後、神戸大学附属図書館がある地域といいますのは、幸いにも電気はその日のうちに復旧いたしました。神戸市でも一番早い復旧ではないかと思えます。ガスが2カ月、水道が1カ月、交通機関もかなりの間、止まりました。電話も携帯を持っている方はほとんどいない時期で、当初は公衆電話以外なかなか通じないという状況でした。

大学の暖房は重油による集中方式でしたので、これも春まで復旧しませんでした。ですから、翌18日から徒歩でまたは他の移動方法で出勤できる職員が集まりまして、館内の電気ストーブをかき集めて暖を取りながら、当時図書館職員が約100名おりましたが、安否確認をしました。電話で連絡がつかない人は、上司がバイクで家を訪ねます。すると、残っているのは焼け跡だけだったということもございました。職員の1割が住居を失いました。職場に保存している書類だけでは連絡がつかない職員が結構いまして、職場内の友人から親族の連絡先を聞いたりして避難先等を確認しました。

学部では学生全員の安否確認をしていくわけですから非常に大変なことです。個人情報がるさくいわれております今日、連絡体制をよりきちんとしていかないとうまくいかないのではないかと考えております。1月21日に職員の安否確認をほぼ終えまして、翌日からこのような倒れた書架を立て直し、図書の再配架の作業にかかりました。



スライド(19)

スライド(20)

これは電動書架の状況です。レールを外れまして、書架の間に大量の本が落下しております。

スライド(21)

これは積層の書庫の中の製本雑誌の落下状況です。



スライド(20)



スライド(21)

スライド(22)(23)

ここは神戸大学附属図書館の中で一番ひどい被害を受けました国際・教養系図書室（現在の総合・国際文化学図書館）ですが、この復旧については全国の大学図書館から来られたボランティアによって片付けを行っていただきました。



スライド(22)



スライド(23)

1995年1月1日現在の神戸市の人口は152万365人でした。この震災では死者が6434名、行方不明者3名、負傷者が4万3792名となっております。神戸大学では、学生が39名、教職員2名、41名の方が犠牲となりました。神戸市の人口が元に戻るのが2004年の11月、152万581人。地震前の人口を少し超えました。10月と11月の間でほぼ元に戻ったことになります。元に戻るのに9年10カ月かかっております。これでもまだ、先ほどの長田区のような大火災に見舞われましたところは、元の人口に戻っておりません。

3. 阪神・淡路大震災関係資料（震災資料）の収集 — 「記録」を残すということ —

1) 相次ぐ震災資料収集グループの結成

震災直後から被災地・神戸ではいろいろなグループの結成がありました。震災資料の収集だけに絞りましたが、例えばこの後講演されます坂本さんを中心とした阪神大震災地元 NGO 救援連絡会議文化情報部。それから、阪神大震災地元 NGO 救援連絡会議の中には「震災活動記録室」というのもできます。また、4月になりまして「震災記録を残すライブラリアン・ネットワーク」というのも図書館の有志によって結成されます。あるいは歴史資料では、歴史資料保全情報ネットワーク「史料ネット」が2月に結成されました。

最後のグループは、こういった資料収集グループではありませんけれども、1月30日に東京大学生産技術研究所の研究者たちが「阪神大震災支援連絡会」<KOBEnet 東京>を結成しました。このグループはご自分たちが集めた資料を、六本木にあったときですけれども、生産研の中で一般公開されておりました。これが震災資料の一般公開の一番最初の例ではないかと思えます。私ども図書館から寄贈依頼しますと、「外には出せない」と断られる資料が結構ありましたが、生産研では、研究者がいろいろな委員会の委員をなさっているということで、研究者のルートで入手されて公開されている資料があつてうらやましい限りでした。

2) 神戸大学附属図書館での資料収集開始 ～1995年4月～

1995年4月、私はデータ管理掛長から情報管理第一掛長に異動いたしました。情報管理第一掛長というのは、図書の選書、発注、受入、予算管理を受け持っております。当時まだ学内の体育館は避難所となっておりました。この年の11月ごろまで避難所として使われておりましたし、町の中もまだまだ屋根に青いシートをかぶせている状態でした。

4月になりますと新入生が入ってまいります。被災地以外から入学してこられた学生さんも大勢いらっしゃいました。当時から「温度差」という言葉がよく使われておりました。西

宮まで出ますと阪急電車が動いておりましたので、そこから大阪に出ますと、そこはもう嘘のようにおしゃれでおいしいものが満ちております。でも、神戸では暗い色のズボンと上着、リュックと帽子、そしてマスクという震災スタイルでした。

被災地のメディアはできるだけ復興のニュースを流そうとしておりましたが、地震から2カ月後の3月20日、東京で地下鉄サリン事件が起きました。ニュースはそちらに変わっていきました。「記憶の風化」という言葉もこのころよく使われました。私は学生さんたちにできるだけ震災を追体験していただきたいという思いで、学生用図書として各新聞社が発行している震災写真集などを購入していきました。

そんなとき学外の方から、「今回の震災の資料を網羅的に集めているところをどこか知りませんか。見られるところはありませんか。」という問い合わせがありました。その問い合わせから数日後、4月の中ごろでしたでしょうか、上司から「今回の震災の資料を網羅的に集めようと思うのだけれども、できるか」ということを聞かれました。私は実際に自分が地震を経験して、そしてずっと3カ月間見てきましたので、「面白そうだな」ということで、「やりましょう」と引き受けました。そばにいたほかの掛長は「えらいことを引き受けるな」と思ったと、後で教えられました。神戸大学は、資料を収集・整理・保管して一般公開することが被災地にある国立大学の責務ではないか。その集まった資料は災害復興や地震研究、防災対策、あるいは防災教育に役立てていただけるように広く提供しようと。このような思いで収集を開始しました。

3) 震災資料とは？

震災資料とは何でしょうか。日本は昔から地震国といわれるぐらい地震災害の多い国です。その地震に関する資料をすべて集めていくのは大変なことです。神戸大学附属図書館では、神戸大学が経験したこと、兵庫県南部地震が引き起こした災害、つまり阪神・淡路大震災関係の資料に限定していこうということになりました。

4. 「震災文庫」の構築と一般公開 — 「記録」を整理・保管・公開すること —

1) 資料を収集する難しさ

資料の収集を開始しまして、まず市販されている資料から集めてまいります。今でしたらインターネットで多くの資料を検索することができますが、1995年当時と異なりますのは、選書ツールは紙媒体でした。書店の方をお願いして、取次店のデータベースを検索したリスト

を頂いたりしましたけれども、まだ4月の段階ではそれほどたくさんの資料は出ておりませんでした。

次は図書館で毎日購入しております新聞を地震の翌日までさかのぼりまして、記事を全部チェックしていきます。こんな手記が出されたとか、こんな発表がありましたという記事から、どこに寄贈依頼をすればいいのかということで作成者の情報を集めまして、寄贈依頼をしていきました。あるいは自分の足で市役所や区役所に出向いて資料を集めてまいりました。自分の足で集めるのが、当初は一番早い集め方で、寄贈依頼するよりもずっと早く集まりました。ニュースレターなどは、一部入手しますと、その前の号を寄贈依頼できますし、あるいは継続して寄贈していただくことも可能です。そして発行元もつかめます。

ただ、当時私にはすごく気になっていた光景がございました。それは避難所になっていた公園などでボランティアの方がニュースレターや新聞を印刷して配られているといったニュースがテレビでよく流されておりましたが、一体あの資料はどこに行ったら入手できるのだろうか。図書や雑誌だけでは今回の震災の状況は何も伝わってこない、伝えられないのではないだろうか。網羅的収集というからには、行政資料とか専門的な論文、子供たちの作文、市民の手記、そして何より「ボランティア元年」といわれるほど集まって活躍してくださったボランティアたちの資料を集めなければと思いました。

そこで、先ほどの阪神大震災地元NGO 救援連絡会議の文化情報部へ出掛けまして、こちらの趣旨をお話しして、協力依頼をお願いしました。これで、少しですけれどもボランティア資料への道が開けました。

2) 収書速報の発信 ～1995年7月～

4月の下旬から始めまして6月下旬まで、約2カ月で300点ぐらいの資料が集まりました。網羅的収集とは言っているのですが、同僚の図書館職員にさえ、この「網羅的」、それから「震災資料」のイメージが全然伝わりません。図書館職員でさえそうなのですから、一般市民の方に震災資料を集めていますと言っても伝わらない、分からないのではないだろうかということで、集まった資料のデータをリストにしてインターネットで公開してみたらどうだろうと思いました。まだ図書館のホームページもほとんど発信されていないころです。

コンピューターに詳しい同僚に相談しまして、図書館にありましたちょっと古いバージョンのdBASEソフトで画面を作ってもらいました。一番最初はタイトル、著者、出版者、出版年月、備考の5項目だけという簡単なものを作りまして、それに300点の情報を入力し始め

ました。7月6日に初めてそのリストをあいうえお順に並べまして、ホームページの画面デザインも自分でして公開しました。そのリストを見ていただいて、「こんな資料が震災資料です」「こんなのも集めていますよ」ということを知っていただきたいという思いでした。

リストは電子図書館システムに移行するまで2年間ほど入力項目を増やしながらか維持し、プリントアウトしたのも月に2回簡易製本して「震災文庫」の場所で閲覧していただいたり、あるいは希望の方にお配りしておりました。メディアの方にこのホームページを広報するのに「URLはこうですよ」とお知らせするのですが、まず「URLって何ですか」それから、URLをお伝えするときに、ドットというのは今普通に使いますが、その当時はメディアの方にも理解していただけなくて、最後には「ピリオドですよ」と言いますと「ああ、そうですか」という感じで、インターネット発信というのも本当の初期の段階で大変な思いをしました。

3) 「震災文庫」の分類・整理

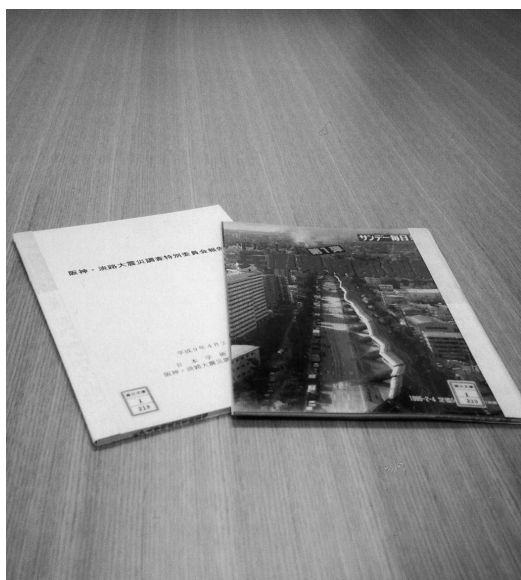
資料がどんどん集まってくると、今度は公開の準備に入ります。まず、「震災文庫」の分類を作らなくてはなりません。この分類も、「震災文庫」を構築しておりました神戸大学の人文・社会科学系図書館（現在の社会科学系図書館）というのは古い図書館ですので、経営・経済・法学の独自分類法を使っておりました。現在は法人化を契機としてNDCに移行しております。当時、目録担当者は古い分類法には精通しておりましたけれども、経営・経済・法学以外の資料には不慣れでした。それも地震工学とか救援、あるいは救急、医学、液化化といった普段扱わない資料がどんどん来るわけです。ですから、分類しやすく、分かりやすくということでNDCの分類を少し変化させまして、一番資料の多いところを少し細かくしまして、16の分類に編集し直しました。ただ、NDCの索引が利用できて、そこから分類しやすくなるように工夫しました。

そして資料の整理法ですが、保管を兼ねた方法にしました。今、大学図書館はしているところが増えましたけれども、図書はカバーを付けたままにする。一般の方はやはり書店で見たイメージで来られますので、カバーを付けたまま整理して配架をする。それから抜き刷りなどの薄い資料ですけれども、簡易製本をしました。ちょうどこちらに簡易製本されたものがありますが、こういった表紙が透明で裏表紙は中性紙を使われているものですね。こういったもので中の資料が見えるようにこういう形態を取りました。

それから一枚もの資料といいまして、チラシとかポスター等の資料ですが、普通一枚の紙

というのは自分で立ってくれません。本は薄くても何とか立ってくれますけれども、一枚もの資料は立ってくれないわけです。それで、どうにかして自立させたいということで、ハードのカードケースに入れて、ケースに分類番号や請求記号、あとは磁気テープ等を張りまして、これをキャビネットに請求記号の順番に配架することになりました。そうしますと、利用者もコピーを取りたいと思ったときは、このケースごとコピーが取れるわけです。表裏2面まではこれ1枚でいけますので、一枚もの資料には十分ではないかと考えてこういうものを使いました。

ただ、A3まではキャビネットがあるのですが、それ以上になりますとなかなかキャビネットでは収納しきれないということで、これは絵画を整理するケースなのですがこういうふうに整理をしております。



抜き刷り等薄い資料の装備



大型の一枚もの資料配架状況

4) 「震災文庫」一般公開 ～1995年10月30日～

「震災文庫」の一般公開は1995年10月30日と、2カ月ほど前に決めました。それ以前も活発に広報しておりましたが、公開日が決まりましたから、まず資料収集を進めるため、それから利用を促進するための二つの意味を持って活発に広報していきました。兵庫県、神戸市、あるいは商工会議所、それから多くの労働関係資料を作っておりました労働基準局といったところに足を運びまして協力を仰ぐ。あるいは大学の教員に紹介状を書いてもらってトップに会いに行くというようなこともしました。7月の終わりから8月ごろにかけて、少しずつ新聞とかテレビ・ラジオ等でも、「震災文庫」を含めた震災資料、記録を残すということ

に注目していただけるようになってきました。

5. 「震災文庫」さまざまな活動 — 「記録」を使ってもらおうということ—

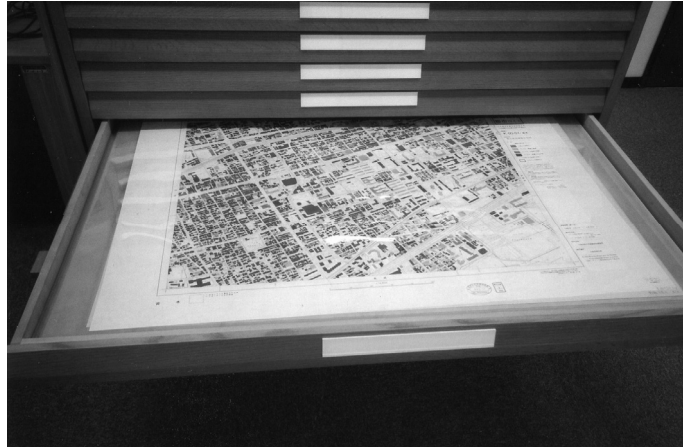
1) 原資料の保存と公開

「震災文庫」では、原則オリジナル資料を公開するということにずっとこだわっております。また、図書館ですので、公開できる資料を扱うという原則を守っております。収集して、公開して、使っていただく。そして、復旧・復興・防災教育・研究に役立てていただくという思いは、当初からずっと一本筋を通しております。

例えば、避難所でボランティアが日誌をつけていて、その中に避難者の病歴とか言動、例えばちょっと切れて暴れたというような記録が残っている。確かに資料としては意味がありますが、そういうものを本当に公開できるかどうかといいますと、図書館では公開がなかなか難しい資料です。そういった一次資料は、それだけを集めるように、徐々に別のグループが結成されていきました。

当時、図書館で購入しておりました新聞が8種類ほどありましたけれども、これも1年2カ月分ほどは製本して保存するようにしました。これは、皆さんご存じかと思いますが、新聞縮刷版というのは東京の最終版です。あるいは、オンライン版では、署名記事というのは著作権処理をしないとイケませんのでなかなか掲載されないということで、1年2カ月という期限を切って、一般の方でも見やすいように製本しました。例えば「神戸市立の小学校で給食の再開がされた日と、そのときのメニューを教えてください」というような問い合わせが実際にあります。そうしますと、地元の新聞あるいは地方ニュースを見れば記事となって出ているのです。ですから「オンラインで済むのではないか」と言われる方も最近は多くなっておりますが、新聞原紙というのは貴重な情報源となります。

また、震災直後に学会が被災地をくまなく回りまして、1戸ずつの建物の被災度を記録した調査地図を持っておりました。これ自体は縮小されて本の形で出ているのですが、原資料の地図が、学会の主要なメンバーの研究室に丸めて積まれておりました。何度も何度も代表の先生と交渉しまして、やっと頂くことができたのですが、何と、粉じんの中で調査されておりましたので地図資料は粉じんまみれの上、周囲はぼろぼろでガムテープで補強されているというひどい傷みでした。



被災度を記録した調査地図

上の写真が地図の一例です。全壊の場所を赤色で表しております。きれいに色分けされておりまして、現在ではもう解体されてしまった物件も数多くあり、建物の被害状況が一番よく分かる原資料です。これを保管して、かつ複写もできるようにできないだろうかと専門家に相談しましたところ、脱酸処理をした後、薄いフィルムの中に挟んで、周囲を超音波式の溶接装置で封印するという方法を勧められました。この方法ですと、ちょうど真空パックのようになっておりますので、元に戻したいときには、端を切れば元に戻るわけです。原資料の保存には一番いいだろうということで、大量にあった調査地図一枚一枚をこういう処理をして、公開しております。

また、この地震では、神戸大学自体は資料が水浸しという被害には遭いませんでしたが、震災の2年後でしたか、古い水道管が破裂しまして、明治時代の卒論が大量に水を浴びてカビが生えるという事態が起きました。このときも専門家のアドバイスで、先ほど内田先生が紹介されておりましたけれども、前処理をした後、大阪南港にあるマイナス40度以下の冷凍庫で急速冷凍しまして、その後、真空凍結乾燥装置で徐々に解凍しました。濡れた紙はそのまま放置しますとくっついてしまいますけれども、急速冷凍して解凍すると、先ほど写真にありましたように紙がぱらぱらになるという本当に初めての経験をしました。

オリジナル資料、現代の資料であっても、収集して保管・公開しようとする時、そのままでは公開できない場合がいろいろ出てきます。保存技術とか修復技術というのは常に進歩しています。それぞれの道の専門家の適切な助言をいただいて、そのときそのとき資料に対してできる最善のことをするということが、図書館で一番大切なことではないかと思っております。

2) デジタル化と著作権処理 ～1998年9月～

オリジナル資料を収集して公開する一方で、1998年秋からデジタル化を開始しました。一枚もの資料といいますのは、チラシ・ポスターあるいはリーフレットなどですが、片面あるいは両面に情報がある資料を指しております。この一枚もの資料の特徴というのが、例えばあるチラシでは「美特」という文字をすごく強調しております。これは、阪大生は近畿圏の国立美術館・博物館などに学生証があれば無料で入れますよという阪大のチラシなのです。このように、一見何を言っているのか分からないぐらい強調される文字というのがあります。このチラシの内容からデータを作るわけですが、データを見られた利用者の想像される資料と現物にはギャップがあるわけです。それで、わざわざ遠くから神戸大学まで検索された資料を見に来られて、見た途端、「ああ、こんなものか」と思われた方が当初は随分多かったように思います。自分でデータを入力しておりましたもそう思いますので、これは何とかならないだろうかと思いました。データに画像を張り付ければ、わざわざ神戸まで来なくてもパソコン上で見ることでお役に立てるのではないだろうか。

ところが、チラシといえどもすべて著作権がございます。それで、チラシの著作権者にチラシデータのリストを送って許諾を取るようにしました。これは非常に煩雑な作業なのですが、思わぬ効果がありました。それは、著作権許諾依頼の手紙を見られた方が、「こんな資料が役に立つのか。じゃあ、こんな資料もあるんだけど。」ということで、重ねて寄贈してくださいました。思わぬ波及効果でございまして、これによって随分と資料を増やすことができました。

3) 科研「阪神・淡路大震災マルチメディア・アーカイブズ」構築

さて、このようにオリジナルなコレクションを構築するというを維持していこうとしますと、やはり予算確保が非常に大切です。資料は刊行されているものよりも寄贈していただくものの方が多いので、資料費はそれほどかからないのですが、寄贈資料を将来にわたって公開して利用していただくには、データを作成して、装備をして、配架をする。あるいは媒体に合った保管方法とか、新たな活用法を検討していく必要があります。

海外で地震がありますと、「震災文庫」にメールで震災資料の提供の要請がまいります。もっとも資料を活用していただくためには何が必要なのだろうかということを考えたときに、共通して使用できる資料、例えば写真は日本語のキャプションは付けておりました

2) デジタル化と著作権処理 ～1998年9月～

オリジナル資料を収集して公開する一方で、1998年秋からデジタル化を開始しました。一枚もの資料といいますのは、チラシ・ポスターあるいはリーフレットなどですが、片面あるいは両面に情報がある資料を指しております。この一枚もの資料の特徴というのが、例えばあるチラシでは「美特」という文字をすごく強調しております。これは、阪大生は近畿圏の国立美術館・博物館などに学生証があれば無料で入れますよという阪大のチラシなのです。このように、一見何を言っているのか分からないぐらい強調される文字というのがあります。このチラシの内容からデータを作るわけですが、データを見られた利用者の想像される資料と現物にはギャップがあるわけです。それで、わざわざ遠くから神戸大学まで検索された資料を見に来られて、見た途端、「ああ、こんなものか」と思われた方が当初は随分多かったように思います。自分でデータを入力しておりましたもそう思いますので、これは何とかならないだろうかと思いました。データに画像を張り付ければ、わざわざ神戸まで来なくてもパソコン上で見ることでお役に立てるのではないだろうか。

ところが、チラシといえどもすべて著作権がございます。それで、チラシの著作権者にチラシデータのリストを送って許諾を取るようにしました。これは非常に煩雑な作業なのですが、思わぬ効果がありました。それは、著作権許諾依頼の手紙を見られた方が、「こんな資料が役に立つのか。じゃあ、こんな資料もあるんだけど。」ということで、重ねて寄贈してくださいました。思わぬ波及効果でございまして、これによって随分と資料を増やすことができました。

3) 科研「阪神・淡路大震災マルチメディア・アーカイブズ」構築

さて、このようにオリジナルなコレクションを構築するというを維持していこうとしますと、やはり予算確保が非常に大切です。資料は刊行されているものよりも寄贈していただくものの方が多いので、資料費はそれほどかからないのですが、寄贈資料を将来にわたって公開して利用していただくには、データを作成して、装備をして、配架をする。あるいは媒体に合った保管方法とか、新たな活用法を検討していく必要があります。

海外で地震がありますと、「震災文庫」にメールで震災資料の提供の要請がまいります。もっともっと資料を活用していただくためには何が必要なのだろうかということを考えたときに、共通して使用できる資料、例えば写真は日本語のキャプションは付けておりました

けれども、これに英語キャプションも付ければ、もっと世界中で利用していただけるのではないだろうかということに気付かされました。また、資料の全文デジタル化もやっていく必要があります。そうしますと、多くの予算を必要といたします。

「震災文庫」では当初より、予算確保に動くように努めてまいりました。付いた予算以上の成果を皆さまにお返しして、さらに使っていただく。それが、ご自分が被災しながらも資料を寄贈してくださる方々の気持ちに応える唯一の方法ではないかと思っております。

今画面に出ておりますように、1995年は田嶋記念大学図書館振興財団の方から、「震災文庫」に置くいろいろな什器類の購入に予算を付けていただきました。あるいは1995年から1997年の3年間は学長裁量経費を付けてもらい、最初の段階を構築することができました。1998年には電子図書館経費が補正予算で付き、1999年から2003年の5年間は科研に採択されて、この「阪神・淡路大震災マルチメディア・アーカイブズ」の構築にかかることができました。それまでは職員手作りのシステムで、データづくりに予算はかけませんでしたけれども、電子図書館システムの導入に伴いまして、デジタル化とデータ整備の2本立てでさらに利用しやすい「震災文庫」を目指すようにしました。

4) 電子図書館システム稼働 ～1999年7月～

震災資料の特徴かもしれませんが、震災から年数が経過しますと、図書とか雑誌でも1冊まるごと震災資料というのはだんだんまれになります。例えば1章だけ、あるいは1ページだけという資料も増えてきます。それを全部集めて公開しようとする、その記事のタイトルの情報というのはどのように構築すれば検索できるようになるのだろうか。そのために、階層的表現でメタデータを構築するということが、この電子図書館経費、あるいは科研によってなされました。

1999年7月に「震災文庫」も電子図書館システムの方に移り、稼働を始めました。手作りシステムから電子図書館のアーカイブ整備へということで、まず一次情報、全文とか画像のデジタル化、一枚もの資料の画像、それから写真、音声、動画の公開と進みました。それからボランティア団体の活動ファイル一式が提供されてこれを全部載せてほしいというのもありました。また、二次情報、メタデータの整備で、今申しましたような階層構造、章とか節、図表、写真まで検索できるように整備いたしました。

5) 「震災文庫」開設5周年記念講演会 ～2000年11月～

2000年11月に「震災文庫」の開設5周年を迎えましたが、このとき、インターネット公開中の情報が2万件、それから一枚もの資料のうち2000点以上が画像閲覧可能になっておりました。

また、この講演会の場で公開準備中と発表した中には、図書や広報誌のデジタル化、あるいは音声資料や映像資料の閲覧、それから地図からのアクセスシステムもありましたが、これらは順次進められています。このあたりは、皆さんのお手元にあります「震災文庫」のパンフレットの中にもご案内しておりますので、ぜひ後で目を通していただければと思います。

6) 「震災文庫」新たな挑戦 — 「記録」を伝え活かすということ —

・「震災文庫」独立 ～2004年10月～

「震災文庫」は、2004年10月に、資料増加への対応と閲覧環境の整備ということで、このパンフレットに出ておりますような場所に移動しました。これが新しい「震災文庫」です。

「震災文庫」を構築するときに、いろいろな掛と折衝して場所がないところにやっと設置いたしました。それが9年たって、これからの増加に備え、あるいは広い閲覧環境を備えた場所を確保することができました。



新しい「震災文庫」

・「震災文庫」デジタルギャラリー

これは現在のデジタルギャラリーです。先ほどのスライド写真はこちらからとりましたけれども、写真・動画・音声、それから図書の全文、あるいはデータファイル、パンフレット

といったものをこちらで公開して使えるようになっております。



「震災文庫」 <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/>の中のデジタルギャラリー

・「震災文庫」デジタル資料の活用例' 08

2008年のデジタル資料の活用状況ですが、日本のテレビ番組、あるいは台湾中正大学地震博物館での展示、スペインで行われましたサラゴサ万博での展示等、国内外でいろいろ活用していただいております。

・阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」との横断検索開始 ～2009年1月～

この2009年1月、震災からちょうど丸14年を迎えました。兵庫県が開設しております阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」でも大量の資料を持っております。ほとんどが一次資料です。避難所、あるいはボランティア団体より集めました16万点というおびただしい一次資料を持っておりますが、その所蔵図書資料と「震災文庫」との間で横断検索をしようということで、この1月に連携が実りまして公開を開始しております。



震災資料横断検索トップページ

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/crosssearch.html>

・震災資料は今も生まれています！

2009年1月25日現在、「震災文庫」の収集資料は4万4000点です。1月はまだ途中ですが、約1カ月の新着資料が「震災文庫」構築14年目の今でも155件集まっております。

「震災文庫」全体では日本語以外の資料が1044件、デジタル化済みの資料が4729件になっております。公開しております写真資料は2万4000枚です。動画、音声、広報誌等のデジタル化につきましても現在に至るまでずっと継続しております。

7) 震災時に図書館職員ができたこと、続けていけること

さて、もう最後ですが、震災時に図書館職員に何ができるのでしょうか。専門性や専門家という言葉がよく使われます。専門家の代表である医師の方は震災が起これば駆けつけて被災者を助けることができます。では専門性が話題となっている図書館職員に何ができるのでしょうか。例えば震災直後の場としての図書館の提供ができます。そして復旧・復興過程で何ができるのでしょうか。

図書館職員というのは司書課程で、あるいは図書館に勤めてからも、分類とかデータ（目録）の作成、整理といった経験をずっと積んでおります。こういった能力というのは、いろいろな場面で役に立つのではないのでしょうか。

図書館職員が記録を残して、次の世代にそれが役立つように伝えていく。そのために今ま

で培ってきた経験をどんどん生かしていく。私たちにできることというのは災害時、あるいは災害の前にも予防、防災教育、研究に、いろいろ生かすことができるのではないかと思います。

これからもぜひこの「震災文庫」のホームページをご覧ください、「震災文庫」を活用していただきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

本文中に使用したスライド(1)～(23)は、神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「震災文庫」に収録されているものです。以下にタイトルと撮影者のお名前、請求記号を記述いたします。

※出典：神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「震災文庫」

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb/>

- (1) 地震発生直後の自宅ベランダから南西方向距離 200 メートルの猛火を見る。震度 7 烈震で揺れたため、倒壊・大破が多数発生した。(撮影：谷道好氏) 請求記号：震災-1-358
- (2) 管理棟屋上から市街を望む、神戸市街の状況を遠望(平成 7 年 1 月 17 日午後 2 時頃)(撮影：神戸大学附属図書館) 震災-1-145
- (3) 宮前商店街の北側入口(撮影：進藤裕之氏) 震災-1-95
- (4) JR 六甲道駅の南東側の状況(撮影：進藤裕之氏) 震災-1-95
- (5) 駅舎・高架橋の倒壊した JR 六甲道駅。(撮影：谷道好氏) 震災-1-358
- (6) 戎町公園あたり(撮影：大木本通美氏) 請求記号なし
- (7) 長田区西代通 2 丁目で(撮影：大木本通美氏) 請求記号なし
- (8) 大正筋周辺の焼け跡(長田区久保町 5,6 丁目、二葉町 5,6 丁目付近)(撮影：大木本通美氏) 請求記号なし
- (9) 兵庫区大開通の道路陥没(神戸高速鉄道大開駅の上)(撮影：大木本通美氏) 請求記号なし
- (10) 阪急今津線上を横切る山陽新幹線高架が落下(撮影：酒井洸嘉氏) 震災-1-340
- (11) マンションから一時避難し、公園で夜を明かす(撮影：酒井洸嘉氏) 震災-1-340
- (12) 神戸市役所 2 号館(撮影：大木本通美氏) 請求記号なし
- (13) 旧校舎：旧 A 棟東部分北側壁面：座屈した部分(撮影：川瀬信一氏) 震災-1-280
- (14) 旧校舎：旧 A 棟 3 階職員室：座屈部分(撮影：川瀬信一氏) 震災-1-280
- (15) 甲子園浜 3 丁目、甲子園浜へ廃材を運ぶトラックの列(震災記録写真:西宮市(1 月 19 日-3 月 4 日)・JR 摂津本山駅南広場(3 月 19 日)より)(撮影：米田実氏) 震災-1-366
- (16) 体育館の避難所(撮影：HABIE (ハビー)：阪神大震災・視覚障害被災者支援対策本部) 震災-7-255
- (17) 避難所に届いた衣類の仕分け(撮影：HABIE (ハビー)：阪神大震災・視覚障害被災者支援対策本部) 震災-7-255
- (18) 神戸大学発達科学部グラウンドに駐屯している自衛隊第 37 普通科連隊のテント(撮影：稲葉洋子) 震災-1-s81
- (19) 1 階開架閲覧室/床置き書架の倒壊(頭繋ぎ処置有り)、資料下敷き(撮影：神戸大学附属図書館) 震災-1-145
- (20) 管理棟 3 階電動集密書架、書架の傾斜、検索性通路への図書落下散乱(撮影：神戸大学附属図書館) 震災-1-145
- (21) 書庫、書架からの落下図書の散乱状況(撮影：神戸大学附属図書館) 震災-1-145
- (22) 2 階開架閲覧室、床置き複式書架の将棋倒し、頭繋ぎ無効(撮影：神戸大学附属図書館) 震災-1-145
- (23) 2 階開架閲覧室、複式書架からの落下散乱図書(撮影：神戸大学附属図書館) 震災-1-145